

梅兒譽美

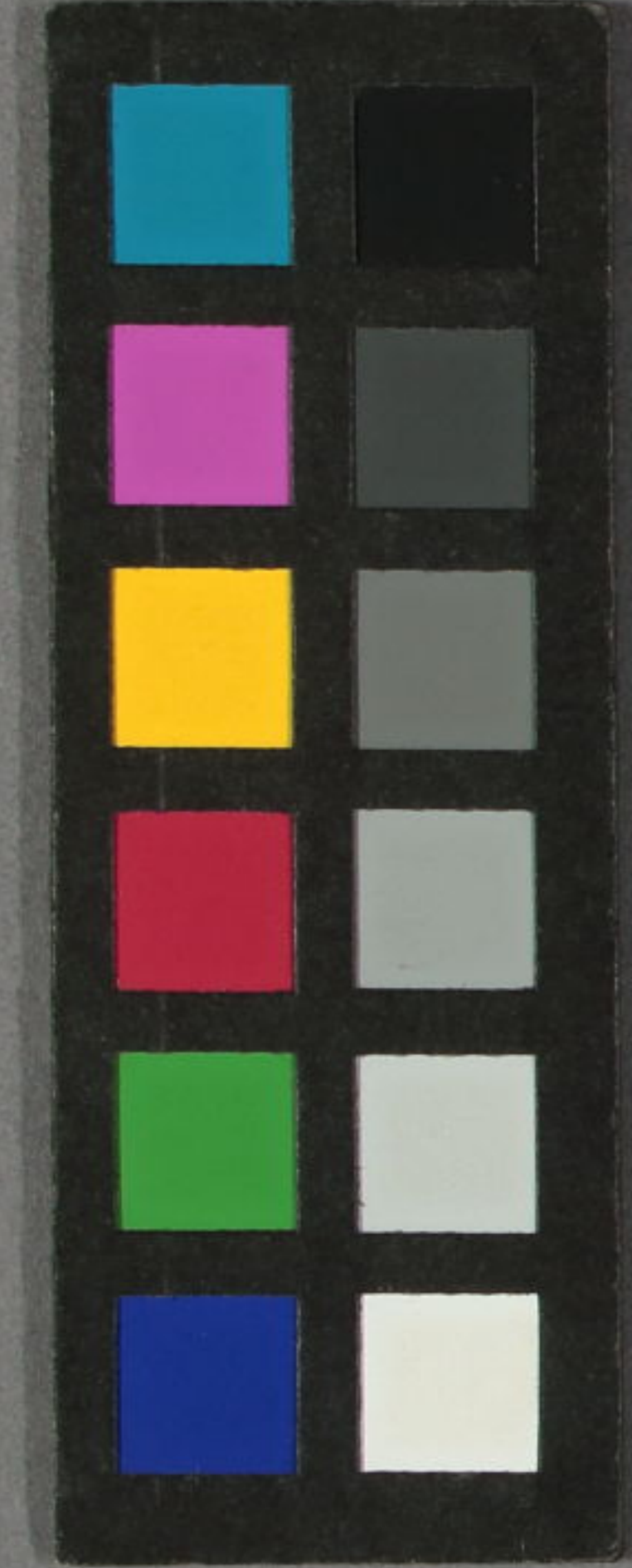
二編

下中

^ 13

3229

1



門 へ 13
3229
/

昭和十一年
七月四日
購

春色梅曆

子細こまごましくお顔かほで息子いぎとを禁制いんせい親父おぢ

も。功德くどく池いけ岩いわ内うち下した字な涌出いづするあはす。

殊勝じゆつつらつら数珠かずすののお母親おかあも喜よろこ提たい

樹じゆの二役ふたやくよう生うれやもさげ。お母おははを名なもあま

さし男おとこ玉たまお后ごうの當あたもあし地ぢすもあま

さし角かく出いるお花はなの御ご達たつの鼓こ弄りやうの

具ふもの。名情の草紙。引く事何れ
 存出ずあし世の細り書肆の米箱
 をうめをさす。是將り小説家の
 戯作の程時万よりよき。人々を
 関る紙梅曆と為る夫人の吉書始り
 して。書之方が金神の金得利と天おん
 得る家のふく福。この年々事の新

板鳴呼趣向如新。きりきり室暖
 梅の遂平及をび。変生女子の新丈夫。
 青漬の梅巻と云め。過ちたりの延
 喜吉慶惠方。向く出方題了。
 阿房れ吏を存め。守而巳

九返舎主人 戲述の無

江戸為永春水著

あ

天保三壬辰年

當今派

永壽堂 西村與八

江戸書林

行 第一魁

文永堂 大島屋傳右門

春正月吉旦

江戸柳川重信画

あ





傾城の賢天くま此柳橋

壺中日月ありくねたふゆと程ぞ
かき下くぬ金邊

唐琴屋内
此糸



婦多川の采八

掛子
流行り
書画の花押
風流の
雅遊
あつさすまの
新文



女髪結

作者此

補ひとせり

女髪結

小梅の於由

画工が筆を志す

梅のあやめ

のうらみ

梅のあやめ

夢とあやめ

阿長

阿長

阿長

蝶吉

再出

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on two pages of aged paper. The script is dense and fills most of the page area. There are several lines of text on each page, with some lines appearing to be part of a list or a series of entries. The ink is dark, and the paper shows signs of age, including some staining and discoloration. The text is written in a style that is characteristic of early modern European cursive, possibly a form of Italian or French script. The overall appearance is that of a well-preserved but clearly aged historical document.

久 傳と遠他より戸棚より取置く仕舞のヨト何と云
の松子梅次は鏡方よりよきと云く心 言 米八さんか
も丸く髪 言葉未付の素人ら 妙心でござんた
さうさういへん 彦がさういへん ちやう梅次舟さん
この梅次連く生人おゆのか 母 ちやうさ女の二人でござ
で せいのさう果しるころのさういへん 梅次舟さん
米八の先折く梅さんともいふ 母 ちやうさういへん
おの梅次さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん
大骨折く梅の解と云くおせんともいへん 母 ちやういへん
おの梅次さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん
ちやういへん 梅次と米八一夜にござんた 母 ちやういへん
下る丹次舟さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん
背中をさぐり梅次舟さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん
知(は)らる(る)梅次舟さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん
おの梅次舟さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん
おの梅次舟さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん
おの梅次舟さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん

ひい ちやういへん 梅次舟さんいかに梅さんちやういへん 母 ちやういへん



狂刺亭主人

以中子

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

とうへ

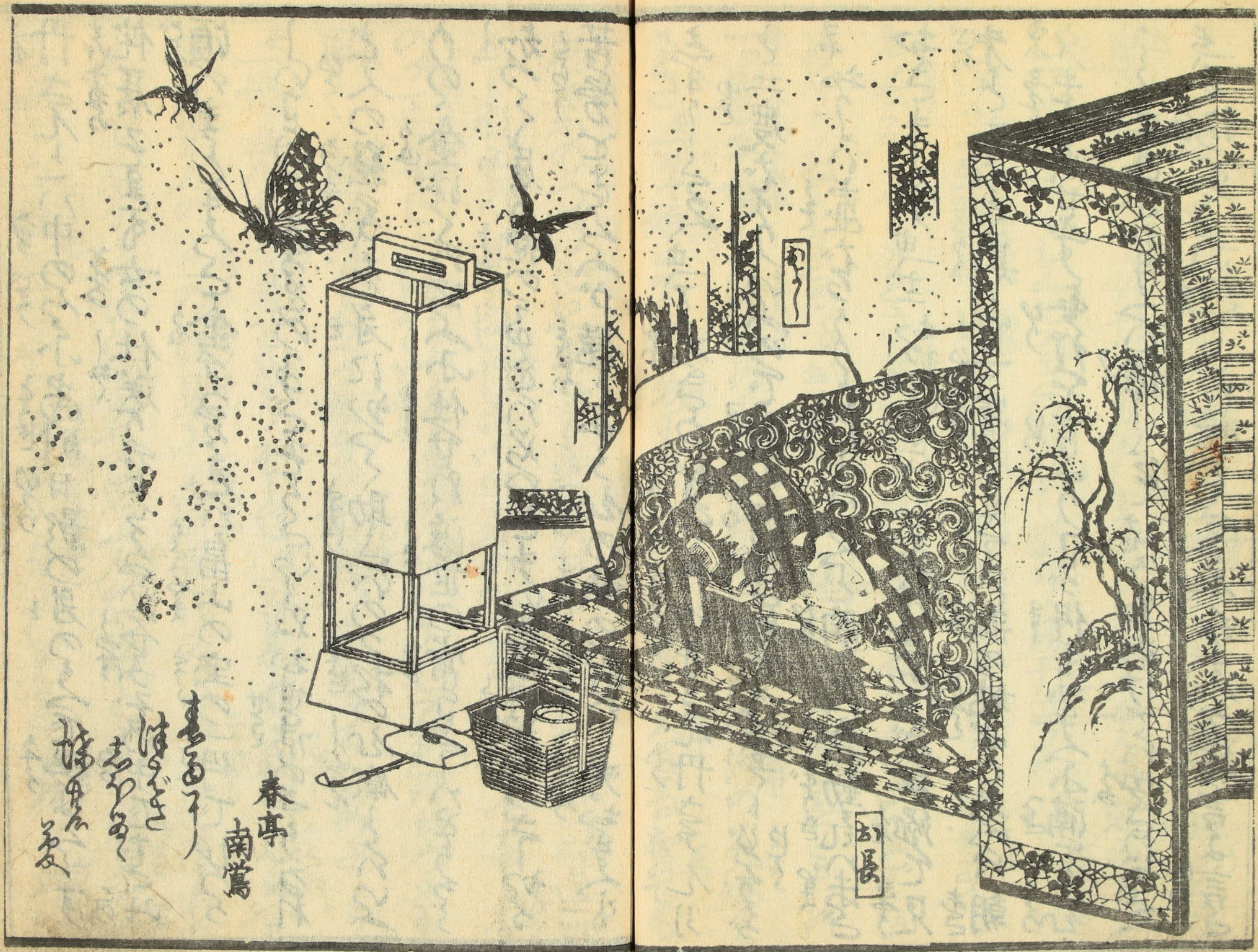
よへ

いへ

かくらふ事その風情も丹江希も米八ヶ見継よ月日
 を送るゆいりにしてまじり中ぞとらば不昔ねどゆいり又
 捨ら且ね時宜ありとどろぐぞ其身より丹江希
 と活業てく思案よくまじり門只見えねぬ若老三人
 三ノ一とあえりや人ま姉きえの由ちくきい今自ハチト志
 方へすのまじりて在存せんがらぞとまじりてまじりまじり
 えへまじり外でもまじりてこの姉の女をまじりてく人の
 世話もまじりてまじりて此所おまじりて若老の丹江希と

かくまじりてあも志をね入尋ねてこの代官所々
 巖の川に詮きなき此宅におまねておまねて近所不
 かりておれ姉はかえり孫おまねておまねておまねておまねて捕
 の役目まじりおまねてまじりておまねておまねておまねておまねて
 滝目よおまねておまねて又言おまねておまねておまねておまねておまねて
 ハ由ちておまねておまねておまねておまねておまねておまねておまねて
 長いおまねておまねておまねておまねておまねておまねておまねておまねて
 るおまねておまねておまねておまねておまねておまねておまねておまねて

おのの目責く白状さ存るとありふめくまの今ぐ丹
比布が落度とありハ島山なるの金の一件千五百両と
いハ大金とありとて中由覚とありヤ日廻もてき
めく物でもわくそまらぬ小ありや丹比布の
街の頭人あり丹比布が身と大切ふらぐ金の二面を
あふふといふ入めらふもあふふといふらふらふら
お世帯ごすくあふふらふらふらふらふらふらふら
且と無斬やおもていふらふらふらふらふらふら
序小縄とけ村の役人附とて所の日羽一三人お由が
宅の窓よりとて見まへり頭人が此通の志とて枝葉
の若く退ての口は法その女は宅へあがりて若く奉
とらふお世帯のおもていふらふらふらふらふらふら
ハコト又見あふらふらふらふらふらふらふらふら
重あつて来るめつと胸をうらむ取らむと自さうと懐
の洞小ある道の台やおもていふらふらふらふらふら
くを押し隔しとてお世帯の婦人お世帯の人の側へは



春亭
南鶯
喜あつ
清きき
志やあ
姉
夏

長

多く翌夜が明くさしと能智恵も出さるらうと
私も丹えの活の鳴よびさるる更けの客子の聲が
小ぶらひて赤きよらうといふささくおきの焼くまも
亦おまの男の才のうらみひるすてんよくと寐るま
耳よ曉の撞もろぞと待あすをと意し地よ迫り
ての粹る小梅の名ふも似と胸の煙ハ瓦焼竈よ
朝霧よもさく勝久人そらむ折る笑ゆる朝勤の
本中寺の壽量品お長夫と必ひこむ丹を糸が

夏そくさの壽あがま未あぐ二人一所と量るる品
こそかひ世の中の人さるくの物おと察一心のある
人の哀まるとおれど欲よのそめける匹婦の情あり
実の恋の要ハあますと嗟人情と推たるまば人間万
事中庸のわざよくまらんかてくもあるる

○ つらえの梅小雪ふる志門て
○ うらうあまをかぞえん雲の霧
松

第十齣



春色梅見譽美 卷の六

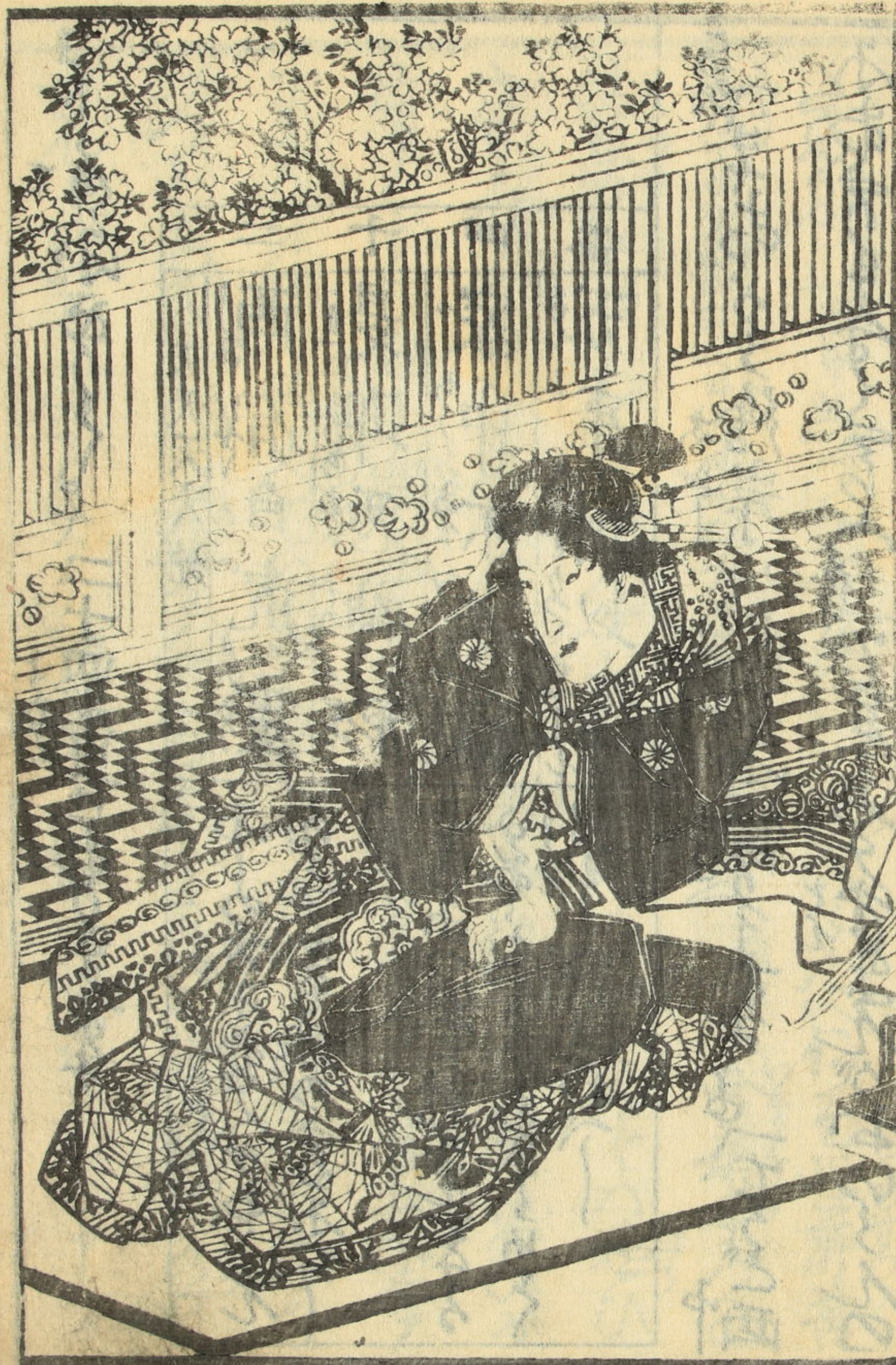
江戸

狂訓亭主人作

第十二齣

鳥トリ一羽ヒトトリ濡ぬれて出でたり朝あさ接つ露つゆ成なり會あひま此こゝ糸いとの客きやくとわたり
 て朝あさまま元もと霧きり屋やが家いへ小こ女めささひひ表おもて二階にがいの定さだ酒さけより
 ちちろろししるる皿はら小こ鉢はち下したへ持もちちその跡あと小こめめの婦めづ多た川がわの米こめ
 八やが糸いと小こめめのねね恋こひ衣い思おも小こ糸いとせせるるにあらねねばも胸むねよよら
 けけとと此こゝ糸いとがが一ひと玉たま米こめ八やささええああつつてての糸いとりり糸いとがが自みづか身みをを

くつらむらゝえぬお目よめらふしあしんあしん
らるまゝえらぬ余野にお出で今も帰早におあす
としなまじお母おまうしてせうせうとせうしてあり
あえでいびきすまののせうそつち茶をえとせうい
目もあつしお言ひし下まじり年たよその恨の中
あやとらぬのせうせうとせうおが身の内年とせ
あのかうしてせうせう始めの実よるえのお影で月夜
小池野行も遠あのおと丹えとせう建のおつとせ
えのらふしお目よめは信切その特一は京リヤンてア
住しとらふしあせうが如ふことを格とせう小月との夜
と茶を舟宿室のせうおどち客のあえをあつよあ
づらうあおと恩この二道と情で塞ぐ恋の責動の
お出でせう向ひも荒の出合とらふしこあつよあえ
くしお目よめらふしあせうのせうせうのせう
はあつし言ひしお出でせう舟宿の亭とせうえや相見のせ
お人傳よめらふしあせうのせうせうのせう後とせ



此の後きりとく一きりなり

す

ましく婦のくし切きりでも死し後ごが幾いくばくありあや
そのあやむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
る母の念ねんなむも何なにかむかひのまじりあや一いつれあ
ふむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
まじりあやむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
一いつやとまじりあやむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや

又またむかひとあやむかひの婦むすめ何なにが能あたら
くむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
らむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
したむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
死しる本ほんをこゝろにむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
とゞるあやむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
あやむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや
よりのあやむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや

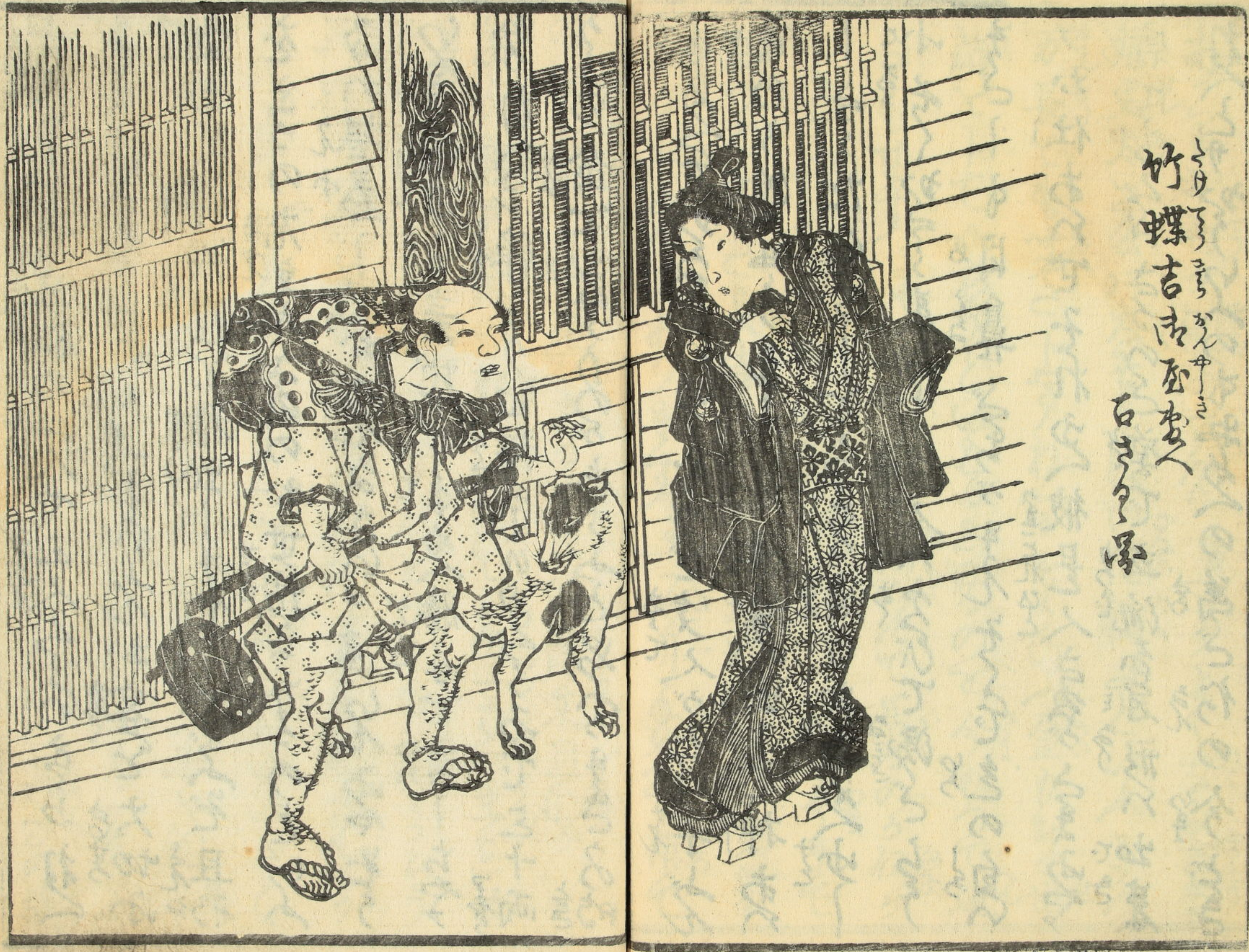
このあやむかひもたゞのち律りつのむかひもたゞの律りつ一いつや

く蝶てうまぢ吉きちくくズズイツイツんんぢぢううめめココウウおお謀まう かろくきさうの
ももハハトトびびええ 後ごハハカカげげ小せう空くう耳じととををししううせせエエ
んんぢぢううめめエエ 後ごハハヤヤササウウナナリリ 初はつまま一一見けんんん 支し度どととわわんん
モモ九くツツググママチチウウビび見けんににししくく支し度どととわわんん
ウウララ 麻まくくししんん 後ごハハトトモモトトモモ今いま向むかのの出でぬぬのの私わたくし
ググ語ごととつつけけねねぬぬぬぬののごごううととよよくく後ごつつてて行いなないいと
ここ年ねんののママ 後ごハハトトモモトトモモししととわわぬぬぬぬのの口くちががららわわんん
ででああるるととままんんささききくくとといいふふののふふちちぐぐししと

居いヤヤアアががつつととおお玉たま一一きき入いりり出でるるととうう座ざ一一たたががああるる
ととうういいふふとと足あし元もとうう鳥とりのの立たちここままううふふささへへままをを
ががアア何なにででももおおままととととうう麻あしよよししててああるるととううぢぢアア
飯いふふもも親おやごごととああんんままりりにに返かえ答こたととううぢぢアア
後ごハハトトモモトトモモししととわわぬぬぬぬのの口くちががららわわんん
ささええんんををよよししるるががららいいととううぢぢアアのの替かへへらら
いいでで二に十じゅうのの二に十じゅうののとといいふふ金かねのの利り合あいいををよよししるるののうう
ととううぢぢアア太たいささままががトトいいひひううけけててななととううぢぢアア

あがらよおそが御ふすかり 後コウよく笑る言を
龍文太さぬハたそりに江内福とていふ人の
万長でも笑ふことやわねうそりい入金のちが世
話とて中らうとしらる志母のそ今めつて返
みもせず。まゐんごまう 泪ぐんで居るのうわが
かゝるしつらがる中いのご不吉なる 去入今身を
浚つて居る長吉教一の所があの世でううツイ
泪がぬえであります 去入うりぬめで替て

てめつでぬるしつらがる中いのご不吉なる 去入今身を
情のういふやうあつらふが廣場へ出して押あ
しつらだらうとてくまらる連由出基めく少
小そくかゝるまゝいふ笑人の欠びで涙ぐらう
まゝいも目鼻ぶらうが牛んそくで色の白
ぐお仕あひせそれゆ彼是人さぬがまゝあや
言てもんごてたるのご婆で立流を身形の出基
ねくとサやういふのもあぬの為ご作の今とき



竹蝶吉清屋主人
百三十九号

十人^{とせ}うち^{とせ}とせで且^や形^のの二人^やや三人^づづら^らならね^く
とせとせけ^がある^めめう^そとせとせの^えお客^とと大切^の
勤^{めて}浄^瑠瑠^と精^出出^しませう^がとせとせ且^形
を^ととる^の充^文太^さの^お世^活よ^ちちる^のとせとせ
る^の堪^忍して^おく^ええ^るとせとせヨ^ととせとせ
り^やや此^方も^言言^はた^ととせとせとせとせとせとせ
お^わね^くこ^し浄^らら^うとせとせとせとせとせとせ
とせとせの^金とせとせとせとせとせとせとせとせ
とせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ

の用^ひひ^不受^を一^{ある}二^枚の^花文^目形^が
あ^らう^恋が^恋の^郭へ^かり^て年^一た^の生^目故^こ
々^のら^うとせとせとせとせとせとせとせとせ
且^形の^らや^ととせとせとせとせとせとせとせ
よ^のこ^ねお^ぐけ^おお^まま^んが^小言^とお^らい^いとせとせ
とせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ
に^ととせとせとせとせとせとせとせとせとせ
言^ととせとせとせとせとせとせとせとせとせ

の中ぢぢ元主人はなやんどといふきくらうがそや
あるとど六七ねいぢえふたより一年ねむどいんぢ
ころあくあ軒あ手あ自あそく唐琴くわんやの女郎ぢやうらう危あやの世よ病ぢ
して居い時とき由あふあ何あも奉公人ほうこうにんときあまうて
勤こめて居いやあーあねあヨあくあ何あすぎあ昔あかあころあの
のあろあ一あ松あがあそあえあるあとあああつて居いやあ志あ
まあせあえあトあいあ少あへありあどあぢあよあハあ一あ年あとあいあも
ああずありあたあるあおあ河あがあ雑あ言あ娘あとあれあよあ迫あるあまあいあの

ちあうあくあくあ折あるあ表あのあ格あ子あ戸あああけあ武あ家あのあ使あと
ふあくあるあ男あ一あイあチあトあおあたあのあミあヤあマあスあ梶あ原あのあ舟あきあ
うあるあ参ありあまあいあとあ蝶あ吉あとあえあのあ近あひあであごあらありあまあん
ああハあくあくあこあらあハあマあ大あきあ小あいあ苦あ勞あさあらあちあヨあ蝶あ吉あ
いあくあ支あ度あとあいあねあくあマあおあ茶あであもあああげあまあせあらあ
今あ日あハあおあ客あさあらあハあ大あげあのあさあらあであごあらありあまあすあらあ
いあマあイあおあ客あよりあ婆あ老あえあのあ方あがあ沢あ山あであごあらありあ
すあすあ接あ川あ善あ好あ接あ川あ新あ好あ湯あ又あ話あ家あであらあ

赤湯七子上羽の蝶の管燈籠下着の角地帯より大
 きく深一丁子菱錫伴の衿の白綾小朱紅を書画
 の印づく袖の緋麻子帯の黒びろろ小紅の帯も
 のらら仕立も圓小ろ三井格子 〰〰〰の腰帯ハ
 おあんど白茶の金まうろ勿論巾の寸五分でも透ぬ流
 行不辨とびんある若丸鬘び小差しはゆるるまどお蝶が
 身に只つぎとちもあるで染まぬ是の浮世うまゝぬ在
 春色梅見誉美六子

あつとそへおよれ

